

---

# Rewrite † song †

のりまき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Rewrite tsongt

### 【Nコード】

N1901V

### 【作者名】

のりまき

### 【あらすじ】

趣味は漫画読破と狙撃

そんな一人の女の子として、朱鷺戸沙耶がもしRewriteの世界に存在していたら？

「笑いなさいよ、あーはっはっはっはってー！」  
これはオカルト研究会で繰り広げられる、起こりえたかもしれない1つの「枝」の物語。

これは、Rewriteとリトルバスターズのクロス物です。Rewrite原作に沿って書いています。そのため片方、もしくは

双方がプレイ済みで無い場合でも話は分かるようになっていきます。  
ただし、ネタバレにはご注意ください。

## memory 出会い

「何だよこれ……くそっ」

酷い有様。家だと思われる建物はほとんど崩れ、瓦礫の山になっている。その瓦礫の下に見えるのは、無残な人の死体。こんな状況を、回りの奴らは「直慣れる」と言ってるが、俺はそんな事は無いと思う。これは、いつどんな時に見ても酷い。逆に、それが現実。皮肉だ。こんな状況だと、食い物があつて、水がいくらでも出て、それであつて安全な街。そんな環境でぬくぬくと過ごしてた自分が馬鹿らしくなる。

「おい！ 誰かいるか！」

まだかるうじで原型を保っている建物。その中の潜り込み、声を張り上げる。足元には、右手を伸ばしている人の死体。これは……大人の男だろうか。この人にも子供とかいたのかも……。駄目だ、考えちゃいけない。考えると忘れられなくなる。駄目だ、忘れよう。

「……っ」

声。かすかに今、確かに聞こえた。生存者か？ どこだ、どこに  
いるんだ？

瓦礫の山をかき分ける。一つ、また一つ。俺の体と同じくらい大きい瓦礫もあるが、別に重くはない。プラスチックを持っているように、軽々と持ち上げられる。

「んっ……」

瓦礫と瓦礫の間に来た狭い空間に、一人発見する。生存者だ。そしてこれは……女の子？

黄色い長い髪に、白いリボンをしている特徴的なツール。そしてエメラルドの綺麗な瞳。多分、年下。

「だ、大丈夫か!？」

「……動くな」

「!？」

気付いた時には、彼女の手には生々しく銀色に光る銃。そして、銃口は俺に向けられていた。

銃を向けられるという行為は、ここでは遊びでは無い。日本だったら少女が銃を持つていた所で、エアガンと思われるだろう。だが、ここは違う。ここでは男も女も、子供も老人も、銃で人を殺し、殺される。それだけが紛れもない現実で、平和なんて言葉とは程遠い。

だから、銃を向けられたら、その向けている人間は 敵。そういう事だ。

「大丈夫。俺は助けに来ただけだ」

「うそ……嘘よ。お前が……ここを襲って。そして……殺した!」

まっすぐな瞳。はっきりとした敵意と、そして殺意。でも、体は震えている。当たり前だ。彼女の目に映る俺は殺人者で、銃を下ろした瞬間に襲いかかってくるような人間。いや、もう人としてすら映っていないのかもしれない。

「うっ……」

「お、おい! 怪我してんじゃないか」

頭から血が流れ出ていた。それも、かなりの量。それに、足もかなり酷い。このままでは、出血多量で危険な状況にもなりえる。早急に処置しないと……

「血が出てる。このままじゃマズイ」

手を差し伸べて、一步近づく。ゆっくりと。でも、彼女は銃を下ろさない。やはり彼女からみれば敵なのだ、俺は。

「このままじゃ死んじまうぞ？」

「黙れ！ 動くな！ これ以上近づいたら……っ！」

でも、俺は近づく。彼女を助けたい。別に英雄になろうってんじやない。死にそんな人全員は救えない。むしろ、俺は殺す事さえ強いられる。

ある時、魔物使いの子供を殺した。気付かなかった、なんてのは所詮言い訳だ。そう、俺はこの手で殺した。何人も。ライフルで額を打ち抜き、心臓を焼き、心を砕いた。そんな事をするのにも、いつのまにか抵抗が無くなっているのも現実。正直、最低だ。俺は結局、ただ人殺しなんだ。

俺は、彼女を助ける資格すらないのかもしれない。銃を向けている、だったら殺してしまえばいい。簡単だ。肩にかけているライフルを構え、彼女の額に銃口を向けて引き金を引くだけ。そうすれば銃声と共に薬莢が地面にカランと落ち、目の前の女の子の命はそこで終わるだろう。

でも、助けたい。ただのお節介だ。でもそれが、俺の生き方なのかもしれない。

一步、また一步。徐々に彼女との距離を詰める。彼女の振るえる手で、銃口が向けられている。でも、そんなの関係無い。俺の目の前にいるのは敵じゃない。ただの怪我をした、1人の女の子だ。

助けたい……助けたいんだ。

「く……くるな。来るああア！」

「ぐっ……」

銃声。

瓦礫の世界で、一つの銃弾がその音と共に直線の軌道を描く。それは、俺の体をいとも簡単に突き抜ける。脇腹に辺りが熱い。でも、体は痛くは無い。心が痛い。彼女に銃を撃たせたのは、俺自身という存在だ。そんな彼女にしてしまった事が痛い。俺なんてどうでもいい。だが、彼女は助けなきゃいけない。

「な、何でよ……。何で来るのよっ！」

二発目、そして三発目の音が響く。二発目は後ろの瓦礫を崩し、三発目は俺の左手を打ち抜く。血が流れ出る。でも足は動く。歩を止めない。そして、最後の一步を踏み出し、彼女に辿りつく。

「何で、何で私を殺さないの……？」

俺は、涙を流す彼女を抱きかかえる。重かった。人の重み。さっきの瓦礫とは違う、手にかかる重さ。生きている証拠の鼓動を感じる。

「俺は……お節介なんだよ」

それが、俺の中身のない人生を生きる上での、唯一の柱だから。  
だから俺はきつと、こつしてお節介をしつつづけてる。きつとこれ  
からも、し続けるんだろつ。

「うつつう……。うわああああああん!！」

彼女は俺に担がれながら、叫ぶように泣き続けた。

……。涙が枯れるまで、延々と。



10月3日

森の搜索

夜の森。入口から30分は歩いたか。

「さて……」

広い森……

住宅地に近いためか、動物や虫をほとんど見ない。人間を警戒して、奥に逃げてしまっているのか。

土地の子供にとっても森は良い遊び場だ。

そういえば……子供の頃、カブトムシを取ろうと森に入った事がある。夏休み中ずっとねばったが、一匹も見つける事はできなかった。だから俺は、本物のカブトムシというものを知らない。

いつしか、森で遊ぶことはなくなった。気付いたのだ。森には動物もいないし虫もない。

まるで空っぽの世界みたいで、退屈に思えた。

「……手を上げて」

「っ!?!?」

一人で昔の事を懐かしみながら歩いていると、後頭部に冷たい金属物が接着する。ゴツリと森に不似合いな、不快な音。それと同時に聞こえる、冷たいが、とても聞きなれた声。

「何故ここにいる？ 答えないなら殺すわよ」

唐突すぎる。何故いきなり死ななくてはいかないのだ。そもそも、お前も何でここにいるんだ？ と質問したいくらいだ。

勿論、反論する。

「いや、意味分かんないから」

「それは答えになっていないわ。で、何でいるのよ」

「えーとだな。俺は今、クエストを仰せつかってるんだ」

「どんなよ？」

「か弱い迷える小鳥を探す。これやらないと、ダンジョン脱出フラグが立たないのよ」

「ふーん」

すると、後頭部の感触が無くなる。安全になったと確認して振り向くと、そこには予想通りの見慣れた人影。長い金髪に白いリボンをした、特徴的なツールテールの女の子。

「あいつからわずゲーム脳ね、瑚太郎君」

「まあな。で、沙耶もご婦人様に頼まれたのか？」

「そんな所ね。じゃあ、探しましょうか」

彼女は朱鷺戸沙耶。近所に住む一年年上の幼馴染で、小鳥ともそうだ。趣味は銃<sup>エアガン</sup>。ガンマニア、とでも言えばいいのか。銃の知識と腕だけは、どこで覚えたのか……かなりのもの。でも、その特技は残念ながら祭りの時と、ゲーセンでのシューティングくらいしか役に立たない。なんとも生かしづらい特技だ。

「にしても随分奥まで来たわね……。小鳥ちゃんがここまで深くいるのって初めてじゃない？」

「確かに……アイツ、最近活動的になってるし」

「ったく、いい迷惑よね。こう森に探索しにくるのって私達なのに」  
「確かに」

この辺はまだ、森全体としては浅い方だ。もつと奥に行けば、埋め尽くされるほどの木々が立ち、地面が見えないくらい草が生える。あまり聞かないが、遭難して戻ってこなくなった奴もいる……なんて噂も耳にする。あくまで噂だけだろうが。

「お、なんか落ちてる。どれどれ……」

小鳥を注意深く探しながら歩いていると、とある一冊の本を発見する。

これは……十五点だな。誰だよ、こんなの捨てた奴。捨てるならもつとマシな所に捨てるよ……。

「何見てるの瑚太郎君」

「ああ、見るか？ 俺的には十五点なんだが……沙耶はどうよ？」

「ふーん、『おっぱい大集合。どれも選りすぐりの』って何よこれは！」

「ぶぐつ！」

視界いっぱいにおっぱいが広がる。ここまで前近で見ると余計に気持ち悪い。てか落ちてた奴だから泥付いて更に気持ちわりい……

「これだったらまだ私のほうがおっぱい大きいわよ！ なめてんのかくからああああ！」

「ご乱心の様子。キレる意味が全く持って分からないだが、まあこういう子なのは長い付き合いで既に熟知済みだ。こういうときは放っておけば勝手に自爆してくれる。」

「って何言ってるんだ私はああああ！」

「はいはいはい。もう沙耶のほうがおっぱいデカイのは分かったか

らさつさと行くつぜ。日付が変わっちまうのはごめんだ」

さつさと帰りた。気温は既に秋に入ったというのに亜熱帯かと思っくらい高い。それなのに虫の鳴き声一つしないこのキレイな森は、どこか歪に感じ……

「何でこんなに暑いよ。今秋よ秋なのよ？ あーっ、イライラする！」

「……るわけないか」

「何か言った？」

「いや何も」

……とにかく、早く家に帰りたい。そのためには、早くクエストを完遂するしかないのだが。

「おーい、小鳥」

「小鳥ちゃん。どこー？」

呼びかけるも、全くもって返事なし。もつと奥にいるんじゃないかな。ろっつな。

全く、危ない事をするもんだ。何して遊んでいるかは知らないが。

「小鳥さん」

「いないわね……もしかしてもつと奥？」

「だろっつな……急ぐか」

そんなこんなで、騒がしく二人で歩き続ける事十五分。

「……っわーっわ」

いた。少し心当たる所があったので、行ってみると見事にビンゴ。まさかとは思ったが……カンは当たるもんだ。小鳥は大木に横たわってスースー気持ちよさそうに寝ていた。

「寝てるわね」

「無防備すぎるだろ……」

脱力する。

心配する必要なんてなかった気がする。

小鳥の森遊びは、子供のころからの習慣だ。普通の女の子がするような遊びには興味を示さず、こうして森に入っただけ。周りから見れば浮いている。俺も沙耶もきつと、小鳥と同類なんだろうが。

「何が楽しいのかしらね……」

正直、夜の森で遊ぶのは心配だ。

でも小鳥はこの辺りの森については誰よりも詳しいし、頼まれれば探しに来るのは俺と沙耶の仕事なんだ。俺と沙耶がしっかりしていれば、守ってやれるはずだ。今も、そしてこの先も。

「じゃあ連れて帰りましょ」

「だな。おーい、起きろ」

肩を指先でゆする。ちょっとくらいなら触れても、小鳥は嫌がない。言い変えると、ちょっと以上の事はNGである。俺と小鳥の間には、目に見えない、微妙な境界線が轢かれている。

「……くー」

「こんな時間に熟睡していると夜寝れなくなるぞ」

「……くー」

「おいつてば」

「……すやっ」

無反応。まあ、反応はしてるっちゃしてるが。

「起きないわね……おい、小鳥ちゃん」

今度は沙耶が強く揺さぶる。頭が左右に揺れて気持ち悪くなって顔をしかめる。浅い眠り程度ならこれで起きるだろうが、小鳥には通用しない。相当ぐっすりといっってしまったているよう。

「……」

「ねえ、小鳥ちゃん。起きなさいってば」

さらに強く揺さぶる。だが、無反応。これではまるで、眠りの森の美女だ。だったら優しい口づけでもして起こすのか？ いや、さすがにそれはマズイだろう。

「しょうがないわね……。じゃあ」

沙耶は銃を小鳥に向けて、カチャリとATの銃のリロード物音を鳴らす。ただし、エアガンなので殺傷力は勿論の事無い。でも、当たれば痛い。それもかなり。

「待て待て。それは最終手段だ」

「分かってるわよ。でも、起きないならやるわよ？」

「まあその時はその時。けどな、俺は小鳥起床術をマスターしてる男だぜ？」

こんな時、とれる行動はふたつ。

「好物で釣るか、苦手な物で圧力をかけるか……だな」

ポケットに入っている秘蔵のアイテムを取り出す。茶色の円。描かれているのは『10』という数字と、京都だか大阪だかにあるらしい平等院……なんとか堂。それを一枚ずつ、音を立てながら一枚一枚、手の平に落としていく。

チャリーン、チャリーン

大量の小銭。五枚、十枚。普通の奴にとってはただのはした金だが、小鳥にとっては宝が次々に積み重なっているようなもの。いかに熟睡していようと、本能はきつと嘘をつかないはずだ。

「くふう……」

「動いたわね……」

小鳥の眉間にしわが寄った。脈有。沙耶は無駄に関心している。それにしても、さすがは小銭パワー。熟睡していてもなおかつ、その魅力的な音色は夢にまで鳴り響くのだ（小鳥専用だが）。

チャリーン、チャリーン

「うーん」

残った小銭をむくりと起きあがった。頼り無い足取りだが、きちんと二足歩行をしている。何かに操られているゾンビみたいで、どこか不気味だ。てか、操ってるのは俺って事になるのか。

「凄いわね……十円でここまで入って動かせるものなの？」

「いや、小鳥だからだろ……」

そんなこんなで、俺と沙耶は十円玉で小鳥を森の外まで誘導したのだった。



10月3日

森の捜索(後書き)

沙耶×Rewriteの小説ですが、しばらくは日常が続きます。  
原作と変わって無いですが。

という事で、小鳥登場回でした。

10月3日

幼馴染

「……日付変わってるし」

「そうね……。全く、小鳥ちゃんもやっってくれるわよね」

ゾンビのような小鳥を従えて、俺と沙耶は無事に街に戻る事に成功した。かなり身体が疲れてる気がする。そこまで深い所まで行っていないとはいえ、森は森だ。道路のように舗装された道は入り口近くのハイキングコースまで、小鳥がいたような場所は下は土や草、木の根に覆われている大自然な所。そんな森を、しかも夜中に歩けば、誰だって普通は疲れる。

でも、とうの張本人は気持ち良さそーに寝てるんだよな……。

「いい加減起きろ」

ちょっと頭にきたので、背中を軽く叩いてやった。

「……うっ」

「あ、起きた」

おかげでやっと目を覚ます。まだ寝ぼけてるのか、虚ろな目で周囲を見渡す。5秒ほどたった所で、沙耶と俺に目をとめる。

「あ……瑚太郎君にさーちゃん？」

腑抜けた声。少し可愛らしいこの小鳥を見ると、苦労したかいがあると思う。幼馴染だろうと、女の子なんだ。可愛いのは可愛いし、綺麗なのは綺麗な。

ただやはり、他の女の子に対しての感じ方とは、少しなりと違う

所があるのもまた事実。

「おはよう」

「……おはよう。ええと？」

周囲をきよろきよろと見回して状況把握を急ぐ小鳥。それが完了したのか、いきなり目を丸くして騒ぎ始める。

「わっ！ 夜だよ！ 暗いよ！」

当たり前だ。

「小鳥ちゃん寝てたわよ、森で」

「え……」

小鳥は沙耶にそう言われると、少し顔を赤くする。恥ずかしそうに手を後ろに当てている辺り、恥じるというのはあるらしい。だが森で寝てた事については、自覚症状は無いらしい。

「あ……そうだったねえ。そうかそうか。もしかしてここまで運んできてもらっちゃったり？」

「……まあ」

運んだというより、使役したと言った方があっていいるかもしれないが。それも小銭パワーで。

「そうかあ、お手間かけちゃったねえ」

「いいわよ別に。どうせ暇だったし」

「ありがとうね」

そう俺達に言つと同時に、に入らつ、申し訳なさそうに笑いをこぼす。

「全く……。よくもまあ、森のと真ん中であんな熟睡出来るわよね……」

「いやーすごく幸せな夢を見ててね」

「夢？　どんなのだよ」

「自動販売機でジュース買ったらね、おつりの小銭が永遠に出続ける、ビックドリーム」

「うん……非常になんとというか……アレね」

こちらから聞いておいて言うのも何だが、高校生の割に非常に安上がりな女である。今時小銭（恐らく10円の事だろう）が大量に出てきただけでここまで幸せになれるなんて、ある意味恵まれている。

「いつまでもいつまでも貯金箱にコインを入れ続ける事が出来るのだよ」

「まあ、小銭が永遠に湧いてくるんなら、そうでしょうね……」

とても目を輝きさせながら話す小鳥に、呆れ気味に頷く沙耶。見ていると面白くないコンビの漫才みたいになっている。だが、小鳥はそんなのお構いなしに安い幸せについて語り続ける。

「こないだ一千万貯まる貯金箱つてのを買ったんだけどね」

「デカイだけじゃない！」

あまりの衝撃事実にも、さすがに突っ込んだ（というか、突っ込まざるをえなかった）沙耶。だが相変わらずに小鳥はその自慢話を続ける。

「いやードラム缶みたいに大きいの」

「そんなの買っちゃったのね……五百円玉のやつかしら？」

「んだよ」

「えーと、二万枚って……」

貯まるもんなのかそれは？ 一日一枚貯めたとしてもえーと……とりあえず、順調な人生ならばとづくに仕事してるくらいじゃないか？

でも貯まったら願いが一つ叶う、とかだったらいいな。神様のなのが降臨して。

「人生にハリができるよ、へへー」

「……」

沙耶はもはや無言だった。

まあ本人が満足してるなら問題ないか。

「まったく……森で遊ぶのもほどほどにきなさいよね。探すのはこっちなんだから……」

「あはは……ごめん」

申し訳なさそうに小鳥は言う。だが、恐らくまたこれと同じような事は起こるんだろう。きっとそれが代わり映えの無い日常。

「随分と遅かったですね。何をやっていましたのですか？」

と、ここで小鳥のマダムご登場。気品と威厳に満ちた方である。何を隠そう、小鳥の捜査クエストの依頼人はマダムである。

「すみません。小鳥ちゃんが奥に行ってしまったため、発見が遅れてしまいました。それと、瑚太郎君がアホな事やってたので」

万弁の笑みで解説し始める沙耶。

おいちよつと待て。そりやおかしいだろ。まあアホな事してたのは確かだが……それ俺だけか！？ 絶対に違うって！

「何で一人でやってる事にな……」

「殺すわよ」

「……」

笑顔と右手に銃持つてるのがシャレになってない。あれ、エアガンだと侮つてるとロクな目に逢わないんだよ。改造で威力が強化されてるし。

「分かりました。よく働いてくれました」

「へえ。すいやせん、予想外に手間取っちゃって」

俺は思わず下男のように頭を下げる。癖になりそうで怖い。

「いいえ、ご苦労様でした」

「おかあさんおかあさん、二人はいい仕事したよ。どーんとお礼してあげてよ。どーんと」

小鳥がそう言うと、マダムは瞑想するように目を閉じた。そしてすぐにその目を開けてこう言った。

「いいでしょう。では、このほうびは後日改めて」

「やったー！ 瑚太郎君、報酬よ！」

何だろつ。ミスリルのよろいとか水のはごろもでもくれるんだろ  
うか。

「結構。では小鳥さん、帰りますよ」

貴族の波動を放ちながら、しゃなりしゃなりと去ってゆく。

「そつだ。小鳥、明日は学校来るのか？」

小鳥がじつと見つめてきたので、何となく聞いてみる。小鳥は普  
段学校を休みがちだ。理由はよく分からないが、小鳥曰く大事な事  
をしているらしい。勿論気になるので、何度か追求はしているのだ  
が、その都度あしらわれてしまふ。小鳥はこうなると、いくら突っ  
掛かっても口を割らないし、機嫌を悪くしてしまふ。なので、理由  
は知らないまま。

「多分、明日は行くと思うよ。休んでばっかいられないしね」

「だったら一緒に行かない？ いい加減、瑚太郎君と二人は飽きた  
わ」

「飽きたとか言つなよ。俺にとっては女子と二人で歩ける貴重な時  
間なんだぞ」

会話の通り、小鳥がいない時は、沙耶と二人の事が多い。だから  
と言つて、付き合つてるとかそういう間柄では無い。幼馴染のよし  
みなだけだ。小鳥もそつだ。

ただ、異性として意識しているかと聞かれると……多分している。  
幼馴染とはいえ、二人はれっきとした女の子なのだから。ただ、今  
の俺の真意は、自分でも分からない。多分その理由は、あの出来事  
がどこかで引つかかっているからだ。

「じゃあいつもの所で待ち合わせな」

「随分と嬉しそうだね。私がいるよりも、さーちゃんと二人っきりのほうがいいんじゃない？」

小鳥が嫌らしい目つきをしながら、おちよくるように聞いてくる。勿論即答してやる。

「二人なのもいいけどさ、やっぱり三人でいるのが一番だよ」

「そうよ小鳥ちゃん。二人もいいけど三人のほうがよっぽど楽しいわよ」

当たり前的事だが、沙耶も同意見。小鳥も同じようで、うんと頷いていた。

「でもさ沙耶」

「え？ 何？」

「二人もいっていいのはもしか……」

「ああーっ！ ふ、二人でもいっていいのはあくまで二人しかないからであって……」

俺達幼馴染三人は、夜中の街中で馬鹿みたいに騒いでいるのであった。



10月3日

幼馴染（後書き）

これで10月3日は終了。

やっぱり原作とあまり変わっていない……。これから少しずつ  
変化を付けていけたらなって所です。

では、次話は10月4日です。

10月4日 朝

「……………」

目が覚める。朝の日差しが窓から零れ落ちていて、清々しい朝……と言いたい所だが、正直気分は優れない。

昨晚、小鳥や沙耶と別れて家に帰ったのだが、何かはずっと見られてる感じがした。薄絹の束のようなものが後ろから押し寄せてくるような感触、そんなにも感じた。この時は気のせいで済んだんだ。

ただ、家でいざ寝ようと電気を消した所に突然、誰かに手首を握られた恐怖。氷のように冷たい手だった。それに腕を引かれた。腕を引っこ抜こうとするかのような………すごく強い力。

恐る恐る今一度自分の手首を確認した。今の事が夢ならば何もなはずだ。夢であってほしい。それで済めば楽だからな。だが、俺の手首には強い力で握られた証が、くつきりと浮かんでいた。

つまりは手形が。

そして、俺は気絶した。それが最後の記憶。

「……………」

自分の手首を見る。何も無い。肌色の普通の色。

霊………だったのか。それとも夢で、ただの思いちがいか。

………そうだ。きっと気のせいに違いない。都合の悪い事は忘れるに限る。考えてもしょうがないし、そんな事より現実だ。

「さて……」

今日は小鳥とも、朝登校する約束をしているのだ。気づいたら、時計はいい時間を示していた。明け方に帰宅し、数時間に満たない睡眠で多少眠いが、問題ない。ベッドから重たい体を起こして、着替えを済し、軽く朝食を食べる。

そういえば……肝心の小鳥はちゃんと起きてるのだろうか？

小鳥の事だ、今頃も寝こけてるかもしれない。

充電器と接続していた携帯電話を取り、登録人数が少ない電話帳から『神戸小鳥』の名前を選択する。5コールほどで、小鳥はモーンングコールに答えた。

「もしもし、瑚太郎だけど」

『おわー！？』

突然悲鳴。と言っても、可愛い感じの。もうこの声を聞くだけで、今現在の小鳥の状況をほぼ把握してしまう俺も慣れたものである。

「ど、どうした小鳥！？ まさかまた！」

『おわー！ おわわーっ！』

「……おい」

『おわわーっ！』

「……いや、だから」

『おわーっ、おわわーっ』

かなり言動不審になっている小鳥。焦っているのが携帯越しにかなり伝わってくるのだが、いい加減話してくれないとこっちが困る。数度目かの悲鳴の後、やっと小鳥は俺に聞き取れる言語を話してくれた。

『今おきちゃったよよ!』

結局予想通りなので、全く驚きもしない（出来ない）のだが。今までの実例を考えると、いくらでも予想出来たという訳だ。

一応ダメ元で対策案を講じてみる。

「ちゃっちやと準備して出てこれないか？ 5分くらいなら待つ」  
『クオリティ低すぎるから、30分はかかるよ……寝癖もひどいし』

普通に遅刻コースだった。

「じゃあ出れるまで俺が待つてようか？」

『いやいや、遅刻につきあっちゃいけないよ。それは悪い事だよそれに、さーちゃんが一人になっちゃう』

「沙耶とはいつも一緒だし、たまには小鳥と歩きたいんだよ」

『……嬉しいけど、すまないねえ』

微妙な反応。よく分からなかった。待つて一緒に登校しようと思っただけで言っているのだから、少しぐらい喜んでくれてもいいと思ったのだが。さてさて現実甘いよう。

『じゃあ、さーちゃんによろしくね』

「分かった。それじゃあ、またあとでな」

電話を切り、ため息をつく。途端、家に戻る静けさ。聞こえてくるのは小鳥の鳴き声だけ。小鳥は小鳥でも、兵庫県の鳥みたいなほうの小鳥ではない。羽ばたいて空を舞うほうの、野鳥の小鳥だ。

幼馴染の小鳥だが、あれでなかなか難しい。捕まえようとしてもどこかに行ってしまう小鳥のようだ。昔からそうで、そして今もそ

うだ。だが、これからはどうだ。女の子だし、いつかは誰かと結婚したりするのだろうか。その相手は、もしかしたら……

「いやいや……」

さて、時計を見ると時間がかかなり切羽詰まっている事に気が付く。中身がからっぽの軽い通学カバンを手に抱え、足早に玄関に向かう。見送りは誰もいない。そのため勿論返事も無いが、行ってきますと一言家に向けて言い、俺は門をくぐった。

「よっ、おはよー」

「おはよう瑚太郎君」

待ち合わせ場所に行くと、既に制服に身を包んだ沙耶が暇そうに立っていた。ただ待ち合わせ場所など決めなくとも、三人の家は一分圏内にあるので適当に立っていれば大概それで済むのだが。

「でだ。残念ながら小鳥は今日来ない」

「ええー！ まさか、また寝坊したって言うんじゃないでしょうね？」

「そのまさかだよ」

さっきの俺と小鳥の問答と内容がそっくりだ。ただ立場は逆になっているが。

「久々に小鳥とも歩けると思ったんだけどな……」

「何、私と二人は不満かしら？」

「いや、沙耶と二人だけってのは全然いいんだが、やっぱり小鳥とも……」

本音だ。俺は確かに小鳥と一緒に歩きたいし、喋りたい。過去に俺は、小鳥にあそこまで迫ろうとしたんだしな。これくらい思っているのは当然だ。

「そう。確かに、小鳥がいないのは残念よね……」

「まあ次からはもっと早く起こす事にするよ。んじゃ行くっぜ」

「そうね……」

沙耶の声に覇気が感じられない。沙耶も小鳥と一緒に行きたかったんだろう。朝からテンションの下がる日だ。全く、勘弁してほしいものだった。

「そういえば、今日二年に転校生が来るらしいわよ」

他愛のない会話をしながらいつもの通学路を歩いていると、沙耶が一つ話題を振ってきた。転校生。そんな話、俺は聞いていなかった。勿論、俺はそれに食いつく。

「二年って、俺の学年じゃないか」

「そうよ。でもこの時期に転校って面白いわね」

「確かに。どんな奴なんだろうな……」

ちよつと考えてみる……

?+?+?+?+?

パターン1 いきなり痛い

『ふっ……俺の名か？俺の名は閃光の狼。真の名は だ！よく覚えておくがいい。それがお前の人生の最後に刻まれる名前だ』

……駄目だ。これには先駆者がいる。アイツを超える壁はデカイからな、多分こんな奴が来た所ですぐに影が薄くなるだろう。次だ。

?  
十?  
十?  
十?  
十?

パターン2 最初の挨拶で意味不明

『ただの人間には興味ありません。もしこの中に(以下略)』

……こんな事言い出すのは変な方向に知識の付いた奴か、素でか  
なりの変人か、それか世界を動かせるくらい  
の力を無意識に持った奴か。これも無いな……次。

?  
十?  
十?  
十?  
十?

パターン3 時間軸を飛び越えてきた

『私も 少女になったよ!』

……意味分かん。これは話しかけられたほうも困惑するだろ。  
それに、これは自己紹介どころかただ伝えただけだろ。これも却下。

?  
十?  
十?  
十?  
十?

パターン4 空から降ってくる

……これはよくあるよな。ただ実際に残念ながらスカートの中を  
拝めたり、いきなりヒップドロップされる事は相当な奇跡が起こる  
必要がある。

「わあああー！」

そう、結局こんな声して人が落ちてくる事なんかないだろう。現実には……ってえ？ 今何か聞こえたぞ。しかも、結構近いんじゃないか？

「今の声何だ？ 沙耶、お前も聞こえたか？」  
「……ええ」

隣に歩いていった沙耶に尋ねるが、空返事で返される。でも聞こえてはいたらしく、探るような目できよろきよろしている。声の主を探しているようだ。そして、沙耶の目はある一点、坂の上にある学校近くに生えている、一本の木の所で止まった。

「瑚太郎君。あれ……何だと思う？」

今度は逆に質問される。俺は沙耶が指差している木を凝視した。どうもガサガサと上の方がうごめいているみたいだった。動物なんだろうか。それにしても、猫なんかには大きすぎる。じゃあ……まさか本当に？

「ねえ、確かめない？」

俺の意図を突くような提案。俺はそれに即オーケーする。断る理由も無いし、俺の本能が興味を誘っている。

「ああ。なんか面白そうだしな」  
「そここなくっちゃ！」



俺と沙耶は、チャイムという絶対的な敵が現れないよう祈りながら、木の中でうごめく何かを確かめるために、急ぎ坂道を登り始めた

10月4日

朝（後書き）

（やっと）原作と流れが変わってます。と言っても、別に大きく変更する事があるようなないような……。会話の矛盾が発生しないように気をつけなくては。

10月4日

落とし物(者)

「瑚太郎君、避けて！」

「うおっ！」

沙耶の警告を聞いて素早くバックステップをする。次の瞬間、自分がいままで立っていた場所には重量感溢れる鈍い音と共に一つのダンボールが落下していた。避けていなければ一直線に脳天直撃コースだっただろう。

「なんじゃこりゃ。ドロップ品の宝箱か？」

「ダンボールよ」

「それは分かる。でも、ダンボールが降ってくるって……」

「上よ、木の上。多分、アレが何か関係してるわよ」

上？ 上に何かあるのか？

見上げる。すると、木の上のほうで茶色い物体がガサガサともがくようにつごめいていた。別に虫ではない。動物であるのは確かかなようだが、遠くてよく見えない。もう一度よく見ようと目を凝らした瞬間、

「わあああー！ーっ！？」

がさがさあーっ！

その物体が落下して木が大きく擦れる音と、高い声の悲鳴が盛大に俺の耳に聞こえてきた。

「あ、落ちてきたわね」

「うおっ！？ な。なんだっ？」

落ちてきたそれは途中で引つかかったようだが、先ほどとは違って何かはすぐに確認できた。だが、その落っこちてきたのが、かなり風変わりなんだが。

「い、いたた……」

「うわぁ……」

まさかの女の子が天から降って来た……

服を見る限り、うちの制服じゃない。見た事の無い茶色い制服のようだ。大変な事態だったのは思うけど、しばし思考が止まる。

木漏れ日に、薄く高い葉擦れの音。

ブロンドに近い髪の少女。羽みたい髪飾りもついている。

「漁師の網にかかった魚みたいね、これ……」

沙耶が詩的なのか漁師的なのかよくわからない発言をする。でも的確な表現だ。もがき具合が魚そっくりである。

いや、でも考えるとやっぱり上から普通に落ちたんじゃないかこれ！？ 落ちてくるって時点で普通じゃないが……ともかく、空から落っこちてきたってのは現実離れすぎる。

「ねえ、貴女……大丈夫？」

「あっ！」

沙耶がそう尋ねると、わたわたた、と体を動かす。木の枝はゆるがるが、体制は全く変わらない。身体が太い枝の隙までUの字にはまっていて、起きあがれないようだ。

そして、今にもぱんつが見えそうだりする。ヒラヒラとするスカートは、吸いつけるように男子の心を引き寄せる魔力を持っている。

こういうのを、チラリズムっていう奴だろうか。

「大丈夫じゃないみたいです……降りられません」

「いや……あれだけ盛大に落下して降りられないで済んでるの、逆に凄いなと思うわよ」

「済んでません、あちこち枝で擦りきれて痛いです」

「だから、それで済んでるのが凄いのよ……まあいいわ」

顔をこんな感じ ( < | > ) にして言っているが、ともかく大

怪我はなさそうなので、そう焦る必要はなさそうだ。

そう思うと、パニくっていた頭も冷静に動き始める。とりあえず、隣にいる優秀なパートナーに意見を乞う。

「なあ沙耶、これどう思うよ?」

「どうって、貴方が思うようRPG的な要素は無いでしょうね。そのダンボールだって、キーアイテムが入ってるけど、鍵が無くて開けられない……みたいな箱じゃないし」

確かに。ダンボールには引越し業者お馴染み、アリクイさんマークのロゴが入っている。宝箱でもなく、魔法のツボでもないそれは、ファンタジックな要素ゼロ。不思議要素は皆無だった。

「あの子だって、天から降って来たわけでもないでしょ? どうせあの辺の坂から落っこちて……って時点でかなりおかしいけど、それは置いておいて。まあ足でも踏み外して落っこちたんでしょ?」「ガードレールあるのに、どうやって落ちるんだか……」

落ちるか普通……?」

「そういえば古臭い外国かなんかのアニメで、ダンプにどっかああ

ああん！ つ吹っ飛ばされたキャラクターが、荷物と一緒に豪快にぶっ飛んで、荷物をとどける。なんてのあつたわね」

「ああ、それにチャレンジしたのかアイツは」

びゅーんと飛んできて、『ちわー、お届け物です！』これで配達完了。

うん、これは確かに早い。そして効率的で環境に優しい。エコとか騒がれてる今だからこそ流行りそうな方法だ。きつと世にその素晴らしさを伝えるために、体を張って挑戦したんだろう。

「いやつつつつほおおおー！ー！！ 今がチャアーンストッ！！ とばかりに突っ込んで、びゅーんとぶっ飛ばされてここまですりついたが、着地に失敗した……という感じがしらね」

「説明はバツチリつくな。つきはするが、それは普通死ぬからやっぱありえない」

「そうね。で、アホな話は止めにして……どうする？」

アホな話に区切りをつけ、俺と沙耶は再び目を上に。先ほどの変わらずわたたと身体を動かして脱出を試みようとしているようだが、以前体制は変わらないまま。必死でスカートを抑えて（と言っても、角度を変えれば多分見える）海老みたいなひの字になったまま。

「なんだってまた、こんな状況になったんだ？」

「落ちたんです」

「そりゃそうでしょうね……」

普通だ。いたって（あんな所から落ちるのはともかく）普通だ。まあ、動けないと言うならば、それは人として助けようと思う。沙耶も沙耶で、何かしらの方法で助け出そうとしていると思われた。

「しょうがない……登って救出するか」

「それが最善ね。じゃあ私は下から補助するわ」

「オッケー」

さてと、こつこついう時こそ男の出番。俺は木に登ろうと足をかけ、手を伸ばして飛び出ている枝を一つ掴む。少し揺さぶって折れない事を確認して、懸垂で一気に体を上げようとした所、短い叫びみないなのが聞こえる。沙耶の物では無いから、必然的に俺の上にいる女の子の声になる。

「あっ！」

「ん？」

「ぱ、ぱんつ見たら怒りますよ!？」

いや……返答に困るんだが。

「いや……別に見るつもりも無いけどさ。ただ、その体制でこの角度だと既に危ういんだが」

「私はもう見えてるけど？」

「わーっ! わーっ!」

短いスカートのすそで必死に隠そうと試みている。が、大して変わらぬ。

思うんだが、ジョシって連中は、何故そんなに見られたくないってのに、わざわざスカートを手短かく履くんだろうか。

「お、男の子はこつち来るなら絶対見ないでくださいっ!」

「見ないでって言われても、なんか登るとき上見たらそれでアウトじゃね? という感じだ」

後一歩足を進めれば、まず間違いなくその神秘の空間の中が俺の目に飛び込んでくるだろう。

「それでも見ないでください」

「おいおいお嬢さん、じゃあどうしろって言うんだい。助けなくていい？」

「だ、だめですっ、助けてくださいっ！ 降りられませんからっ」

じゃあどうしろと……。俺は少し離れた所で腕を組んで立っている沙耶を見る。何？ と言わんばかりにこっちに振り向いた所に、一つオーダーを試してみる。

「じゃあ俺の代わりに沙耶が登っ

」

「制服が汚れる」

即刻オーダー拒否されました。

「そつでございますか……」

まあ確かに、うちの制服は白が基調だ。女子のなんかは純白と言えるんじゃないかというほど真っ白だ。でも、俺も制服なんですからね……。まあ汚れても気にしないが。ならばどうするか。なんとという難題……。  
ためにちょっと角度を変えてみる。

「……あ」

やべ、ちらっとピンクが見えた。



「なんかで隠せないか？」

「動けないから無理ですー」

なんか怒ってるみたいと言われる。でしょうね。動けたらお互い苦労しませんもんね。はい、野暮な質問でしたすみません。

「じゃあつまり、上を見ずに、あんたもほぼ視界に入れずにここを登って救出しろと」

「です！」

元氣な返事ありがとうございます！

「よし沙耶。見なかったことにして通り過ぎようぜ」

「あーっ！？ なんですかそれ冷たすぎませんかっ！？」

「だって無理なんだからしゃーないだろ」

「それでも男ですかーっ！」

いや、男だと思ってるからぱんつ隠してるんだろつとツッコミを入れたいんだが……。にしても、礼儀知らずというか、助けてもらう側なのになんだってあそこまで注文多いんだ？

「まあ、俺は何も見てないから気にせず通り過ぎるよ……。えろ紳士に見つかつて『グツパン（Good Pants!）』とか言いながら写メ撮影されるなど、俺に見られるよりよほど悪い状況を想像しながら待ち続けているがいいさ」

「それはありえないでしょ……」

実際そんなえろ紳士等見た事無いハズなんだが、想像が容易に出てしまうのは何故だろう。親指を突き立てながらウインクをする髭を生やしたおっさんの姿が脳裏に浮かぶ。

「そ、そんなのいやです〜っ」  
「瑚太郎君、誰もいないのに何を言ってるの？ さっさと行かないと遅刻するわよ」  
「おっと、悪い悪い、独り言を言っちゃった。さて、筋肉でもしながら学校に向かおうぜ」

俺は両腕を縦に揃えて、左右に振るようにダンスをする。沙耶も一緒に合わせて腕を左右に振る。よし、行くぞ！ さあ、みんなも一緒に踊ろうぜ！

「はい、筋肉筋肉〜」  
「筋肉筋肉〜」

そして世界は筋肉に包まれた……。

「ぷす〜っ」  
「なんかウケてるわよ……大丈夫？」  
「さあ……？」

これまではウケる以前に引かれまくってた滑り確定なネタなんだが、どうやらウケてしまったようだ。筋肉恐るべし。

「ってわけわからない踊りしながら行かないでください〜」  
「じゃあ見えてもいい？」  
「だ、だめですっ」  
「じゃあ、グッパン！（Good Pants!）」  
「わ、わかりましたからあーっ！」

もう一度歩き出す。だがかなり必死っぽい声で泣きつかれたので、

しょうがなく足を止める。何だかんだで見捨てられないのが俺の性格。結局木を登り、下の沙耶と連携して降ろす事になった。今度はかりは観念したようで、先ほどのように騒ぐ事なくおとなしくしていた。

……因みに、ぱんつはさくらんぼでした。

10月4日

落とし物(者)(後書き)

長さが中途半端になってしまったので、このシーンは次まで続きます。

10月4日

嵐のような転校生

「はあ、助かりました……」  
「にしても凄いわね。本当に怪我してないの……？ どれだけ頑丈なのよ」

全身を見渡す限りでは、髪が少し乱れてるのと服が汚れてる以外は特に自然体。あの高さから落つこちたら、普通はアザの一つや二つ出来てるハズなのだが。奇想天外な女の子である。

「実は私、こう見えて転校生なんです」  
「へー」

こう見えるも何も、どう見ても転校生としか思えないだろ。待て、それじゃあうちに来るって言った転校生はこいつか。

本当に空から降って（転落して）来たって事か……。ダイナミックな転校生である。

「それが、この学校の位置がわからなくて……。ようやく見つけてここまで歩いて来たんですが、疲れて荷物をガードレールにおいて休んでいたところ……」  
「バランス崩して、物の見事に大落下ってわけね」  
「そりゃまた見事におマヌな……」  
「う、うう……」

となると、やっぱりあの上から落下したわけだな。マジで何で怪我しなかったのか。俺が落つこちたと考えると、気付けば頭に輪っかと、背中に羽がついている自身ある。

「いやあ、ドンマイ。そういうこともあらーな」

「まあ誰だつてミスはするものだわ。人生ゲームオーバーなミスはしたくないけど……」

快活な笑顔と言葉を二人で言い慰めてやる。それが恥ずかしいのか、転校生は顔をリンゴみたいに赤面させていた。もしかしたら怒ってるのかもしれないが、微妙なところだ。

「うう……く、屈辱です……」

「じゃ、行きましようか。もうチャイム鳴っちゃってるから急いだほうがいいわよ」

「はい？」

「学校よ。行かないの？」

「あの、屈辱に打ち震えてるんですが」

沙耶と転校生が会話を楽しんでいる間、俺は空から落つこちてきた女の子の物と見られる段ボールに手をつける。あれだけの高さから落つこちてきた割には、若干凹みがあるくらいで原型は保っていた。物まで持ち主に似ているのか……。

ひとまず、親切に持って行ってやることにしよう。見た感じ側面にある持ち手の穴は幸い無事なので、指をかけて腰を上げる。

「……これただの荷物だよな？」

上げて十秒としないうちに、すぐにダンボールを地面に戻す。なんかおかしいぞ……？ これって女の子が持ってたんだよな？ そして持ちながら街中さまよってたんだよな？ だったら今のはありえない……。

俺はもう一度穴に指をかけ、腰を上げる。

「……………!?!」

や、やっぱり重い!?! それも半端な重さじゃねえ……………! ブラウ  
ン管テレビくらいの重さはあるんじゃないか?

「ぐっ、ぐおおおおおおー……………」

重さに耐えきれず、思わずどがあつと取り落としてしまう。

「……………」

馬鹿な……………。そんなハズはない。女の子が街中歩きながらずつと  
持ってたんだぞ!?! それを男の俺が持てないなんて……………肉食系男  
子には分類されないだろうが、貧弱なつもりはない。むしろ腕力は  
強いほうだと思つ。

ためしにさっきの木にぶら下がり、懸垂を試してみる。

「筋肉、筋肉」

軽快だ。とすると、やはりなんかの間違えだ。

もう一度、今度は下から抱えるように試してみる。

「ぐっ、ぐおおおおおおー……………」

やっぱり重い。あつという間に腰が悲鳴を上げた始めた。

嘘だ……………嘘だろ? これはただの間違いだ……………。これは女の子が  
細腕で持ち上げて、数時間さまよつて  
いられる重さのダンボールなわけだから。

「さっきから一人で何やってるの?」

引き気味な感じで沙耶が横に現れる。まあいきなり懸垂してダンボール一つにここまで手間取っていたらそれはそう見えるだろう。だが丁度いい。

「沙耶か……。ちょっとこのダンボール持ってみるよ」

まあいいけどと言い、沙耶が腰を降ろしてダンボールを両手で持ち上げる。持ち上げはするのだが、その上昇は膝の辺りで止まる。腕がかなりプルプルしている。

「重いいいっつっ！！」

どがあつと音を立てて、ダンボールは沙耶の手から転落する。それが丁度、俺の指先に着地。もし、ブラウン管テレビが人の指先に落ちたら、どんな反応が見れるだろうか？

「いつでえええええー！ー！ー！ 砕ける、骨が……砕けるっ！」

「あ、ゴメン。大丈夫？ 今どかす……って、あ」

どがあつ。

沙耶が俺の足からダンボールをどかさうともう一度持ち上げると、素晴らしいタイミングで転校生が沙耶にぶつかる。そのわずかな衝撃のせいで、沙耶の手からダンボールは滑り落ち、それは再度俺の指先に。

「ぐがああああああー！ー！ー！ー！ 俺の足をミンチにでもする気かああああー！」

「こ、これも訓練よ、訓練」



死ぬ、死ぬううううー！ー！ー！ これ冗談抜きでヤバいから！ 早く、早くどけてくれえええええっ！！

俺は上半身をくねらすようにしてひたすら暴れる。冷静に考えれば自分で持つてダンボールをどかせばいいのだが、人つてのはこういう緊急事態に限って冷静さを欠く物だ。

例えば人が放った右手渾身のストレート。右に体を少し傾ければ避けれる物だ。しかし避けれない。結局、事前に訓練していなければ無意識に恐怖を感じてしまい、体が動けないんだ。これも、それと同じ。人は咄嗟の行動を起こせないのだ。危険な場面になればなるほど。

「あ、もしかして私のせいでしたか？」

「まあそんな所ね」

「それはすみませんでした」

何で沙耶に謝るんだ。被害受けてるのは俺だ！ という突っ込みは置いておいて……。

申し訳なさそうに転校生は俺の前に立つと、指先の上のダンボールをひよいと軽々しく持ち上げる。おかしい、絶対におかしい。あの重さをあの女の子があの細い腕で……

「ありえない……そんなわけ……」

「いい加減認めなさい。この子は超剛腕で、格ゲー大会では禁止にされる程のパワーファイターなのよ」

やれやれね、と言って沙耶は手の平を空に向けて言う。例えが意味不明だったのはとりあえずスルー推奨という事か。それより、俺の上に荷物落としたってのに微塵も申し訳無さが現れて無いのだが

……。まあいつもそんな感じと言えばそうなのだが。

「で、さっきからなにしてるんですか？」

「確認だ」

「意味がわかりません」

どっちかと言うと、意味が分からないのはそっちのほうがなんだがな。

「よし、じゃあいこうか」

ダンボールを受け取る。その瞬間、ずしっと強烈な重さが両手を襲う。なんとか自分にたがだかダンボールだと自己暗示をかけ、その重量に耐える。

「ぐっ。ぐおおおおおおー……」

「ねえ瑚太郎君。努めて冷静に振舞おうとしてる意味のわからない努力は認めるけど、顔真っ赤で血管浮いてるから」

「照れてるのさ」

すまし顔（血管浮いてる顔でらしいが気にしない）で涼しげに答えてやる。何故そこまでやるかって？ そりゃ女の子に荷物持たせて、自分は楽にしてるなんてプライド的にどうかと思うだろ。

「あのー……重いんですか？」

「女の子が細腕で持ち上げて、街中さまよっていられる重さのダンボールが重いはずがないだろう」

「いや腕プルプルしてるし、声震えてるから」

女の子二人に囲まれて、必死にとてつもない重量に耐える俺。何

か絵的に非常に痛々しいが、ここまで来たらこれを落とすわけには  
いかない。最後まで届け切るのが男としてのプライドだ。

「武者震いさ……」

「足もガタガタな状態で、何馬鹿な事言ってるのよ。アホじゃない  
の？」

「そうです。私持ちますよ？ 力強いですし」

アホだと……？ 知った事か。ここで俺はこれを渡すわけにはい  
かないんだ。妙な使命感に駆られつつ俺はそれに答える。

「俺の男の子としてのプライドがゆるさない……!!」

「じゃあそのプライド、ズタズタにしてあげようかしら」

そう言った矢先、沙耶がどこからとなくエアガン（強化済み）  
を取り出し、カチャリとリロードする。いや、今そんなのに撃たれ  
たらマジで死ぬって。

「いいから持ちますから」

「えええー……」

そしていつのまにか転校生は俺の目の前に移動しており、ダンボ  
ールに手をかけていた。そのまま自分の元に取り返すつもりだろう  
が、こつちとしてもそういうわけにはいかない。だって、かっこ悪  
いじゃん。

「む」

ぐいと引っ張られる。俺はそれに抵抗してそれより強めの力で引  
張る。

「むむ……」

ぐいぐいと、さらに力を入れて引っ張られる。でも負けるわけにはいかない。俺もさらにくいぐいと引っ張り返す。

「いいからっ、渡して下さいっ!!」

転校生が痺れを切らしたようにキレ気味に力を込める。瞬間、ぱりつと小さい効果音。それが今起こってしまった全てを論じていた。

「あ」

「えっ?」

そう、落下に落下を重ね弱っていたダンボールが破けたのだ。

「うおおおおおっ!!」

「わっ……」

「ヤベっ……」

そのせいで引っ張った力は行き場を無くし、転校生はバランスがとれなくなり、体が後ろに傾き始める。そのまま転倒するだけならよかったのだが、生憎転校生の後ろは坂。そのまま転倒し、勢いを保ったまま……

「わあああーっ!!!!!!」

どさあっ!!ゴロゴロごろごろがっしゃーんっ!!!!

盛大に坂を転げ落ちていき、そのままガードレールに突っ込んで

そのまま下に落ちていった……。

「……………」

無言で横を向くと、丁度沙耶の顔が正面に来る。口をポカーンと開けて、目を丸くしていた。多分、俺もこんな表情なんだろう。

そして暫く向かい合った後、二人同時に坂を下り、あわててガードレールに駆け寄り下を見下ろす。かなりの高さ。もし俺が落つちたならば、頭に輪っかがついて、背中に羽が生える自信がある。意味のわからない自信だが。

「おーいつ、えーと、転校せーっ!」

「もしもーし、生きてるー?」

二人で一緒に声を張り上げる。数秒待っても、返事が返ってこない。おいおいやめてくれよ。もしこれで音沙汰無しだったら冷や汗物だぞ…………?」

「い、いたいです」

幸い、少しの間の後下のほうから呑気な声の返事があつた。どうやら生きていたようだ。見れば、また木に引つ掛かっかけていて、魚みたいにもがいていた。二回続けてとは、運のいいやつだ……。根本的には悪いのかもしれないが。

「何てことするんですかこの人でなしーっ!」

思いつきり糾弾される。え、いや……俺、悪い?

ともかく、あの元気ならばとりあえずは無事な様子だ。

「つて、わああーっ!」  
「あ、また落ちたわよ」

ばさささつと、盛大に葉擦れの音が響く。

「うつわー、凄い転校生ね。いい意味でも悪い意味でも」  
「ああ……」

沙耶の総評には頷ける。後補足すると、さくらんぼだったという事だろな。

そんな事を考えているとふと、騒がしいサイレンを鳴り響かせて救急車が急行して来た。転校生の所まで来ると通り過ぎるのでは無く、落ちたと思われるその地点で停車する。

「あーこれつて、あのまま運ばれるパターンねあの子」  
「だよなあ……荷物どうしようか」

と、後ろのドアが空いて、担架を持った救急隊員が現れる。救助対象は、勿論落つこちた転校生。横に担架を置いて、ものすごく手際良く転校生をその乗せ、救急車に収容する。そのまま救急車はドップラー効果なサイレンの音と、『大丈夫ですつてばあああああーっ!』という叫び声だけを残し、走り去っていった。救急車が到着してからわずか30秒の出来事だった。

「嵐のような転校生だったな……」  
「かなりデンジャラスな子だったわね……何故か心配する気にはなれないけど」

「まあ大丈夫だろ。なんか、頑丈そうだったし」  
「そうね。アレならどんな高さから落つこちても大丈夫そう」

さすが、転校生は事件を引き起こしてくれる。特にこの転校生は話題性抜群だろう。初日に坂から落下し、救急車に搬送されるなど、そうそうお目にかかれる物でもないだろうしな。

「で、この荷物どうするよ……」

「焼く？」

「いや、証拠隠滅してどうする……」

……結局ダンボールは、学校から台車を持ってきてわざわざ運ぶハメとなった。

10月4日 嵐のような転校生（後書き）

ちはや登場シーン（終）

文章にしてみると、ここが意外と長かった事に気がつきました。

10月4日は続きます。



10月4日

エース

荷物を職員室に届けた時には、既に時刻は1時間目終盤になっていた。

幸い俺のクラスの副担任（言われるまで存在に気付かなかった）が職員室にいたので、事情を説明した所、1時間目は出席扱いにしてくれる事となった。

落つこちて終いには救急車に運ばれた超パワーファイター転校生の話全てを信じてくれた副担任には、感謝しまくりである。

「遅い……。ちゃんと来るんでしょうね？」

で、今はなんとも平和な昼休み。心地よい秋の日差しを感じる今を思うと、朝の嵐のような慌ただしさが嘘のようである。

だが、その平和な昼休みもすぐに騒がしくなりそうだった。

「ああ、ぬかりは無いぜ。そろそろ……お、来た」

で、今俺は何をやっているのかと言えば、沙耶と一緒に、吉野と愉快にスキンシップを図ろうとしているわけなのである。バットボーンイナ吉野と遊ぶなんて、最高の計画だ。

「お、噂をすれば」

そして昼休みのスペシャルゲスト。音速の狂犬、吉野が姿を現した。

？十？十？十？十？

「おい吉野、俺とデュエルしろ！」

立場が普段と逆な気もするが……まあいいだろう。

俺は、血に飢えている狂犬、吉野晴彦に面向かってそう言い放った。

普段俺はこういう類の事を避けてるため、俺の珍しい行動に吉野の反応も好調だ。

吉野というのは、この能天気な程に平和な風祭学院唯一の不良とも言える男であり、孤立無縁のアウトロー。そしてどうも、俺の事を常に目の敵にしているようだ。

「ふっ、まさかお前からそんな言葉が聞けるとはな……。なら遠慮はしねえぜ！」

「そうだな。ならばもう語る事は無い……行くぜ！」

そう言っただけで吉野は、目にも止まらないマッハな速度で、右手を振りかざし、決闘盤を展開する。俺も対抗し、同じ右手の決闘番を前に突き出す。お互い一歩も譲る事の無い、熾烈な争い。火花が弾ける、壮絶な戦い。

「俺のターン、ドロー！ ふっ、世界の始まり。天と地が出来し時から使者……。その力を、今こそ時放つてやるぜ……」

「甘いな。俺はお前の手の内は全てお見通しだ……。リバーズオーブン！」

と俺が高らかに宣言したと同時に、吉野が右手のそれを叩き落として叫ぶ。どうやら立腹のようである。さして俺は何かしたのだろうか？ どっちかっていうと、お互い楽しく遊んでいたじゃないか。

「何やれせてんだよてめえ！」

「いやいや、たまには楽しくデュエルするのもいいかなーと」

「ちっ……」

「お、おい。どこ行くんだよ？」

「知るか」

孤独で寂しげな背中を俺に向け、足早に去っていくこととする吉野。その背中がどこか、誰かに構ってもらいたげな雰囲気漂わせている気がする。

なので俺は、アイツに絡む事を辞めない事にする。

「分かった分かった。じゃあ改めて、昼休みにデュエルしようぜ」  
「……何？」

相当俺とデュエルしたいのか、そう言っただけで吉野は振り向いた。こういう時は、単純な奴で助かる。他の奴には無い魅力が、こいつにはあるのだ。その部分はどこか、俺と類似している気さえする。正反対だが、似ているような気がする。吉野風に言つと、光と影。つまりは、カオスな関係と言った所だろうが。相性は最悪だが、お互いどちらかがいなければ生まれない。相互関係なのだ。

「本当だろうな……？」

「ああ。じゃあ昼休み、外で待ってるぜ」

そして俺は、軽く遊ぶ気持ち程度で吉野を誘ったのだった。

？  
+？  
+？  
+？

「こう、エースが集まるといっなのは壮観ね」

「その通りだな。たまらないぜ」

「ふっ、何を言う。エースは一人だけだ」

吉野は鼻で笑いながらそう言った。

俺と吉野と沙耶の三人が、互いに目を光らせているこの緊迫感。吉野に言わせれば、この張り詰めた空気が身も心も躍るくらいにたまらないらしい。

乾いた火薬の咆哮が唸りを上げて火を吹けば、一人の命知らずが生まれ、一人の命の灯がそこで尽きるという事。

「最後まで立っていられた奴だけがエースってわけね」

「成程。そりゃ面白い」

「ああ……」

乾いた風が、睨みあう三人の間を吹き抜ける。

ここ校舎裏という学校の死角は、まさに命知らず達のセメタリ！

「で、お二人とも。抜かないでいいのかしら？」

「そっちが先でいいんだぜ？」

「粹がるなよ。指が震えてるぜ？」

敵同士だというのに、妙な笑いをこぼし合う命知らず達。だが、お互いに警戒を鈍らせることは無く、隙は今かと伺っている。

校舎裏という荒野で対峙する三人の命知らずは、慎重に間合いを測り合う。もう決闘は始まっている。誰が先に撃つてもいい。唐突に決着がついたとしても、それはそれで決闘の結果だ。誰であろうと恨む事は許されない。それが暗黙の了解であり、ルールだ。

「……」

「……」

「……」



円の中には相手は入れない。その外からエアガンで、相手の空き缶を狙うのだ！

「うおりゃあああああ、ぬおりゃあああああああ！！」

「遅い遅い遅い！ 俺の早撃ちを見るおおおおお！！」

パン！パン！ パパパパパン！

激しい銃声が校舎裏に響く。常人では越えられないであろう、超高速のスピード連射。瞬く間に吉野の空き缶は倒れてゆき、カランと虚しくその命を散らしていく。

パパパン！ パパパパパン！ パパパパパン！

だが、ここで俺は異変に気づく。

俺の銃は確かに連射性に優れたATだが、スピードが異常だという事に。

「ま、まさかっ!?!」

俺は背後、自分の空き缶を確認するために一瞬だけ振りかえる。すると、俺の缶は凄まじいスピードで倒されていた。顔を前に戻し吉野の顔を窺うと、驚きが隠せないとも言いたげな焦りをアイツから感じた。

「アッハッハッハ！ 弱すぎて話にならないわね！」

犯人は沙耶。俺と吉野が互いの攻撃で注意が散漫になっている所で、両手で構えた銃で一気にLPを削りに来たのだ。

普通で考えれば同時に逆の方向の標的を狙い、しかも外す事無く確実に撃ち倒す等、常人の為せる技では無い。しかも二丁同時に。

だが、沙耶はそんな人間場なられた技をやってみせていた。

「く、くそっ！」

「ヤロウ……やりやがったな!!」

俺と吉野は慌てて沙耶のLPに狙いを定め、まるで連携しているかのように同時に銃弾を放つ。だが倒れない。勿論それは、俺達が放っている銃弾は命中していないという事。

この時、沙耶と俺達では決定的な実力差がある事に気付いたのだ。

「え、エースだ……」

無力という現実に打ちのめされた俺は、思わずそう呟いた。

だが、吉野はそれを否定し、こう言い変えた。

「そんな生ぬるいモンじゃねえ……。ああいうのは完全無敵って言うんだよ」

そして、チャイムとほぼ同時に俺の最後の空き缶が倒れ、敗北が決定した。

10月4日 エース（後書き）

最後の纏め方が……そして吉野初登場回でした。

原作だともつと後のネタですが、そこはご了承ください。

まだ10月4日は続きます。



10月4日

嫌われる

「終わった〜」

本日最後のHRも終わり、終業のチャイムが鳴る。この音を聞いた時ほど心が躍るのは意外と無いのかもしれない。

「おつかれー」

俺が席を立つと同時に、本日見事に遅刻してきた小鳥からの気の抜けた優しい声。いつ聞いても心が和むこの声。聞き慣れていると言えはそうなのだが、毎日のように聞ける事が安心でもある。

俺の過ごす日常において、欠かすことの出来ない声。

「授業わからんかったろ」

「うん……」

本日もめでたく遅刻してしまった小鳥から、苦笑いで返事が帰って来た。

まあ近頃連欠してたので、学校に来ただけまだ進歩と言えはそうなのだが。

「ここ数回で一気に進んだからな。中間テスト、危機だな」

「まじやばいかもだよ」

テストというのは学生に襲いかかる最難関とも、ある意味でこれを受ける事こそが本業言えるだろう。

俺は幸いそれなりの成績をキープしているのだが、休み気味な小鳥は毎回テスト前に焦る事になるのは日常茶飯事。

「そもそも出席日数からしてやばいんじゃないのか？」

「それは平気だと思う、ぎりぎり」

「小鳥は部活もやってないしさ。先生も評価しにくいぞ」

小鳥という人間は、

『学生時代を通して帰宅部に所属し、おうちに帰る事の大切さを学びました』

と面接でアピールしかねないほどの家女だ。

自宅兼森林警備員と言わんばかりに、家と森ばかりにいる気がする。学校が無い時は実際にほとんどそうだろう。一人で何をやっているのかは知らないが、いつも心配でしようがない。

そんな事を思っているが、俺もついつられて帰宅部になってしまった。

「テスト前にはやっぱり、二人で沙耶に押し掛けるか」

「だねー。困った時のさーちゃん頼り」

俺達二人はテスト直前になり焦り始めると、大体は一応先輩である沙耶に詰めかけて勉強を見てもらう。

アイツは先ほどの銃撃戦のような事を始め、漫画やらゲームやらで普段から遊びまくっている割には、何故か優等生並の成績を維持している。おまけに教え方も上手いと、俺達専属の家庭教師のようになっているのだ。

「と、いけね。時間やばいな」

ふと教室の時計を見ると、約束の時間に向かって針がかなり迫っていた。

「何かご用事？」

「バイト面接のようなものに、ちょっと」

「バイトすんだ」

「……ちょっと変わったバイト」

俺がその募集記事を見つけた時に抱いた感想そのままに言う。レジ打ちをしているような普通のバイトでは無く、少し異質なバイト。どちらかという学生からは避けられそうなバイトだが、逆に俺はそれに惹かれた。

「どんなの？」

「一緒に来るか？　すぐに終わると思うけど」

「うーんと」

念じるような声を出して、少し考える小鳥。返答は俺にとっては少し残念な物だった。

「今日はよしとく。しばらくぶりの学校だし、友達とお話でもしていくよ」

友達とお話……ねえ。…いや、踏み込むまい。

「そつか。じゃ、また明日な」

「その予定だよ。またね」

という事は、小鳥は明日も学校に来てくれるという事だった。となると、学校に行くの楽しみが増える物だ。

？十？十？十？十？

「げ」

帰り際職員室の前を通ると、今朝の騒ぎの末、落下して救急車に運ばれた転校生とばったり会った。

人の顔見るなり険悪な顔をされ、開口一番『げ』と言われるとはたまったものではない。

「うーん：俺なんか嫌われるようなことしましたかね？」

「言う事欠いてなんですかそれはっ！ あなたと出会ってから災難続きです！！ 三度も落ちるわ坂は転がるわ救急車に連れて行かれるわっ！！！」

段々声でかくなってるって……

それにおそらく三度のうちの一度には、俺は関与していない。

「そついやあの後どうなったの？」

「事情を話しても聞いてくれなかったので、ムリヤリ脱出してきました……」

おー、きつと映画顔負けな脱出劇だったんだろうなあ。警備員をなぎ倒したりバイクで門を突っ切ったりでもしたんだろ。是非見てみたかった。

「それもこれもっ！ 全部あなたのっ！！」

俺が特撮映画（死語）のような想像をしていたら、目の前でどめとばかりに大声を張り上げながら叫んでいた。

「あなたと出会ったせい・で・すっ！！」

最後は唾を飛ばすほどに、一語毎に強調して言われた。

「えー？ むしろ俺助けに回ったほうだと思っただけど……因果関係を俺に結び付けられても困る。ダンボール破れたのも俺のせいじゃないし……。大体俺がいなかったら今頃さくらんぼ」

大航海時代……と、心で念じておく。

「ぎゃあー！ 何で知ってるんですかー！！？」

今まで聞いた声の中で一番大声な悲鳴。目までまん丸くして、相応な驚きとシヨックを受けている様子。これは禁句だったようだ。

「ソーリー」

「うう…今度言ったらただじゃすみませんよう……」

なんか相当うなだれている。そんな見られたくないならスカートもつと長く履けよと思ってしまうのだが、過去同じ質問をある奴にしたら『それが乙女心なのよ』と言われた事もある。

余計に女つてものが分からない……。

「あら、今朝の転校生じゃない」

俺の背後から聞き覚えのある声が聞こえる。振り向くと予想通り、今朝のもう一人の関係者の沙耶が立っていた。

その姿を確認してすぐ、転校生は沙耶に向かってこう言った。

「あ、今朝はありがとございます」

何でしょう、この俺との態度の違いは。同じく救出活動をしたは

ずなんだが。どうもここまで扱いが違っつてのは腑に落ちない。

「いいわよ別に。実際大したことでないし。えーと、確か鳳ちはやさん……で合ってるかしら」

「あ、はい」

そういえば名前知らなかったな。鳳ちはやってのか。

……鳳ちはや〃さくらんぼ、

成程、覚えやすい名前だ。

「鳳さん、瑚太郎君と同じ二年生よね？ それも、クラスは同じになる予定。随分と仲良さ気でいいじゃない」

「お、そうなのか。よろしくな、鳳」

「あ、ああ。それはよろしくです……けれど」

一応そこはちゃんと挨拶するのなと思いきや、すぐに血相変えて言われてしまう。

「けれど、私はあなたが嫌いです！」

「ええ……」

親切が仇となった結果が、キリッとした目で睨みつけられた上このこの暴言。いったい何でこんな事になってしまったんだろう。もっと普通の出会い方をしていれば、打ち解けて仲良くなれたのかもしれないのに。

「なあ……俺達、やり直せないかな……」

「は、はい？」

「出会ったころ、みたいにさ……」

「……」

鳳はそれを聞いて、ぼかーんとしたまましばらく沈黙する。  
そして旧型PCのような遅さでやっと起動。

「ななっ」

とりあえず鳳ちはやという人間は、物事に対しての反応が色々鈍いらしい。

パワーファイターな辺り、動物に例えると像もしくは恐竜が合う気がする。

「へー随分とラブラブね」

「違います違います！ 何誤解されるようなこと言ってるんですか  
！！」

必死にそこまで否定していると、本気で勘違いされそうな勢い。  
通りすがりの生徒からも、「え……あの転校生、天王寺の元カノ？」なんて声が聞こえる。まだクラスに紹介すらされてないのに、行動といい服といい色々が目立つ転校生である。

「あ、ああっ、ほら、勘違いされてるじゃないでか！ ほら、否定してください！」

「で沙耶。何で鳳の事知ってたんだよ。朝初対面だろ？」

「フフフ…知らない事があれば探るのみよ」  
「聞けーーーーっ！！！」

廊下にこだまするくらい大きな叫びに、多数の人間がこちらに振り向き注目する。転校生は「ゼーっ、ゼーっ」と荒い息使いになっており、顔もかなり火照っていて興奮しているよう。ただでさえ目立つというのにこんな事まですれば、明日紹介される頃には色々な

意味で時の人となれそうだ。

「……どーも仲良くなれそうね」

「だな」

「はっ？」

まさか、というかやはり転校生はからかわれていた事に気づいていなかったらしい。さすがにここまで来ると天然もいい所だが、とにかく面白い奴である。

「うわああーんっ！！ みんな嫌いですうーっ！！！」

さてと……そろそろ行かないと本気でマズイ。この感じだと全力疾走でもしないと待ち合わせ五分前に到着という社会人としてのマナーを守れそうもない。

「じゃ、俺用あるから行くわ」

「あっそ。んじゃね」

そそくさと退散することにする。

「……」

だが歩き始めてから直後、熱い視線を背中に感じる。  
振り向くと当たり前といえばそうだが、転校生が俺を睨んでいた。  
いきなり嫌われるってのはどうも……。

「ぎゃああああさくらんぼってよく考えたらあの時見られてたあ  
ーっ……！」



やばい、今頃まずい現象に気がついてる。

「沙耶、後は任せた！」

「じゃあ貸しーって事で」

こういつ時は迅速に脱出するしかない。

俺は背中に当たる怒声を無視し、人がまばらの廊下を一気に駆け抜けた。

「ちよつと待てええええええ！！！」

また変わり者な人間が、この学園には増えそつだ。

10月4日

フェイク&トゥル

この街の住人は、やはりどこか潤っていたりする。別に肌がうるおっているとかがいとおばさんの発想では無くて、金銭的に豊かという意味だ。

それを決定付ける証拠、という程でも無いが、うちの学校にもやはり金持ちが多い。俺の家も決して貧乏なほうではない。ほとんどこの町から出ていない俺の基準だから、一般的には俺の家も十分金持ちで、俺の思う金持ちは大富豪なのかも知れないが。

この国は、世界はまだまだ広くて俺の知らない事が数多く存在しているのだから。

(さてと、指定されてるビルは……と)

で、その貧乏では無い俺が何故バイトをするのか。理由は、少し思う所があったってだけ。

まず第一にお金が欲しい。家が裕福だろうが貧乏だろうが、働かない学生は親からの小遣いに頼るしかないわけで、今の金額では少々物足りないというのが現状。お金を欲しがない学生というのも逆に珍しいだろうから、適切なバイトの理由だろう。でも、それ以上の理由がこれにはあった。

別に俺はバイトで無くとも良かった。それこそ、目新しいことならなんでも。自分の幅を広げられる行いなら。

それで変わる気がした……。だから、俺はこうしてバイトに挑もうとしているわけだ。

(混んでるな…)

人通りが圧倒的に増えていた。数か月前と比べても、目に見て違

う。駅前のほうまで行けば、歩くだけでも難儀しそうなほど人が溢れていた。日のあるうちでこれだから、帰宅ラッシュとなる夕方はもっとひどくなるだろう。

(…そういえばもう10月か)

この人混みが季節感だと言っても、大半の人は疑問を浮かべられる。これはそう、この街特有の季節感であり風物詩だ。

10月と言えば、祭りの季節が近づいているという事を示す。人の出入りが激しくなり、街が人で溢れるのもこのせいだ。

街全体の祭りだから、その規模に合わせて準備期間も長い。駅前の掲示板にも、それを匂わせるバイト募集の張り紙がたくさん張り出されていた。

収穫祭短期アルバイト、ホールスタッフ、野外音楽ホールスタッフ、イベントスタッフ等々。自給や日給の額も見てみると、どれのなかなかの好待遇。裏を返せば、そんだけきつい仕事内容だったことだ。

きついのは構わない。どんな力仕事だってこなしてみせる。ただ、俺はもう面接の予約を入れてしまっていた。

「さてと、そろそろ時間か……」

俺は少しそれらのバイトに惹かれつつ、掲示板を後にした。

?+?+?+?+?

「つまりは、ネタ自体の面白さよりかは、ライターが面白がってる様子がこう……、読者に気力のように伝わる事が一番大事」

指定されたビルの中の編集部。その一室で俺はタウン誌の記者ライターのバイト面接を受けていた。この若い編集者さん（安西さんと言う）は、うちの学校のOBらしい。そのせいか、最初は緊張したものの今はいい感じな雰囲気面接が進行している。

「雰囲気重視…という感じですかね？」

「そうそう。ノリ重視って所かな」

で、このタウン誌というのがまた変わった雑誌で、学生の間で広がっている噂話、いわば都市伝説のようなものを掲載している物である。そして文面もかなり独特で、ブログみたいな雰囲気ライターが書いている感じ。安西さん曰く、内容も勿論大事だが、それよりライターが面白がってる様子が伝わるのが第一だと言う。

要は自分でネタを拾ってきてそれを記事にして提出する、という訳だ。それが採用されて雑誌に掲載されればバイト料ゲット！という訳だ。そういう内容のため、ガッツリ収入が入るようなバイトでは無いし、最悪ほぼ収入0なんて事も考えられる。

「じゃ面接はこれで終わりです。採用通知は…電話でいい？」

「はい、それで結構です」

「うん。じゃあお疲れ様でした」

編集者さんが立つのを確認してから、俺もパイプ椅子から立ち上がりドアのほうに足を進める。模範的な面接だったかはともかく、個人的な感覚としてはかなり順調な面接だったと思う。

これで採用されているなら万々歳なのだが…さて、結果が楽しみだ。

「まだ夕方か……」

暗くなるまでには、まだ多少の時間があるのだが、生憎する事と言えは何一つ心当たりが無い。中学生の頃は家に帰りたくないがため、ゲーセンで暇を潰すなんて事もそこそこしていたが、高校生となった今ではそんな事も無い。家に帰っても誰もいないからなだけかもしれないが。

オフィス街を眺めながら歩いていると、色々と思う事がある。

忙しく歩くリーマンに、屋内で手際よく仕事を捌いている公務員。ビルの上のほうにある巨大モニターに映る芸能人。そこから視線を横にスライドさせれば、数本のケーブルのような物で吊るされた台に乗って窓ふきをしている人。どれも大変そうだ。

俺にもいつか、こうして毎日働く日々が訪れるのだろうか。自分のために、それが誰かのために働く日が来るのだろうか。

それは遠い未来のようだが、ふと気付けば今など酸っぱい過去になっっているくらいに近い今な気がした。

時間は寝ていても、必死で走っていても、時計の針は1秒1分、カチツと歯車の噛み合う音を鳴らして止まる事なく確実に進んでいく。

それは過ぎ去ってほしくない今は過去に変わり遠く離れ、訪れたくない先がだんだんと今に近づいて来るという事。

それは変わる事の無い世の中のシステムであり、誰として改変することは出来ない絶対の決まりだろう。いくら過去に逃げようとしても、未来に先走ろうとしても、時の流れはその速さを変える事無く進んでいく。

無くした時間は取り戻す事は出来ないが、これから得る時間は何かを変える事が出来る。

無駄に過ごしてきた時間は取り戻せないが、何かを変えたいんだ。

「よし、それじゃあデジカメでも探すかな」

取材用のデジカメ。その類の道具、機材はがあると記事作りで便利だと教えられた。向こうのほうでも貸し出すとは言っていたが、自前の物を使っても問題無いと言う事らしい。それ以前に、いちいち買いに行くのも面倒だ。

そんなに高くなければ、先行投資として買っておくのもいいかもしれない。

「こうなったら手当たりしだい捜しまくるぞ！」

と、へそくりまで引き出して気合を入れたまではよかったのだが

……

「おい、兄ちゃん、待てや」

(いきなり……)

夢中で探していたためか、いつのまにか見知らぬ通りに迷い込んでしまっていた。しかも、ガラの悪い連中が多い。俺とは済んでる世界が違う人達だ。

「な、なんすか」

「……見ろや」

そして早速絡まれている今現在の状況。

正直、焦る。

「気合入った入れ墨っすね……」

男の顔には、炎の入れ墨が入っていた。それが蠟燭の小さな炎だったら怖くもが無いが、どちらかというと地獄の炎を連想させるような強烈な業火みたいな物だ。

今言った感想は、素直な気持ちだ。

「そつちじゃねえ。こいつらを見てくれ」

で、男は何で俺に話しかけてきたかと言えば、勧誘だ。

男は露店をやっていた。陳列台には、いろいろな商品が並べられている。その中にデジカメがあるのは幸運か、それとも不幸なのか。

「兄ちゃんはや、デジカメが欲しいってツラしてるぜ」

「当たってます…」

「しかも仕事かブログ…携帯カメラ以上のモノホン志向でフォトしたいと思っているな」

「はい」

図星です。

「この機種はどうだい。安くするぜ」

男は陳列台に乗っている一つのデジカメを手にとって俺に突きだす。パッケはいかにも高価そうな雰囲気漂わせており、男との組み合わせも非常にマッチしている。

「値段は…?」

控え目な声で俺はそう尋ねると、男は嬉しそうにニヤリと笑う。

逆にその笑みが怖い。

日常的に人を殺している人間の貌<sup>かお</sup>。獲物を狩る狼のような表情だった。

「今ならお得なグットプライス、5万円ポッキリだぜ」

「え…（俺の所持金を軽々上回っていた!）」

「どうだい。学生ローンも使えるぜ」

「い、いや……」

男がこちらに身を寄せてくるのと同じ距離を、俺は震える足を引きずりながら後ろに後ずさる。

その姿は、狩猟者に襲われている小さい小動物みたいで、さぞかし滑稽なんだろう。

「こんな値段じゃ二度とお目にかかれないぜ?」

「いや、ちよつと予算が…その…」

瞬間、背筋に電撃が走る。それは、このままではやられるという本能からの現象だった。

そんな事はおかまいなしに、男は俺に近づいてくる。このままだと、壁と挟まれて動こうにもどうしようもない。

逃げるなら…今しかない。そう思った。

「すみません!」

「お、おい、待てコラ…!」

背中に聞こえる怒声を無視して、俺は逃げるようにしてその場を全力で離れた。

あやうる中つ国あたりの悪質コピー商品を超ポツタプライスで売りつけられるところだった。

裏路地は超恐ろしい場所だと思った。これ以後は出入りを気をつけよう……

しばらく歩くと、また別の露店を発見。こちらの店主は先ほどの男と違ってニコニコと穏和そうだ。



陳列された商品にはデジカメが多い。正にここだと思った。

「デジカメいくらっすか」

「ひとつ1000円から」

「安！ 神の店!？」

正に俺が追い求めていた店、そのものだった！

「毎度ありがとうございます」

それにやはりと言うか当然と言うか、店主の人当たりもさっきの男より圧倒的に良い。常に低姿勢で思わずこちらも頭を下げたくなるような人柄だ。

心は八割方傾いていた。

「ちよい待ち」

「…何？」

突然、今時なチャライファッションに身を包んだ男が、路地の奥からやってきた。

俺より年上で、今時の若者という単語がぴったりだ。

その男は、陳列台のカメラを指差してこう言った。

「あんだそれさあ、パチモンだよ？」

「え？」

「外国製の品質の低い奴しかも違法コピー品」

そう言って今時の男は、カメラを一つ手にとってパッケの裏を見る。そこを軽く見た後、「これ見てみ？」と言い俺に手渡す。

言われた通りにそれを見ると、ものすごく小さな文字でこう書い

てあった。

本製品は高級デジタル機をイメージしたツヨーク商品です（原文ママ）

何という注意書きのクオリティの低さ！

「ね」

「げー…」

手に取っていたカメラを、丁寧に（叩きつけたい所ではあるが）露天に戻す。

「見てくれだけは丁寧に作ってやんのな、これ。このあたりも怪しい連中が増えたもんだよな、オツチャン」

「な、何のことでしょう？」

「いいんだよ。こんなのだまされる方が悪いんだし」

笑いながら軽い口調で今時の男はそう言うと、唐突に俺の肩を叩きながら言った。

妙に馴れ馴れしい気がしたが、ここは合わせておいた方が身のためだと判断。

「ただこいつ、俺の知り合いだから、勘弁してやって」

「……いや、まあ……」

「サンキュー。んじゃ、商売頑張ってなー」

今時の男はそう言うと、露天の店主は微妙な表情をしながら商品をかき集めてすぐに立ち去ってしまった。

騙されかけたとはいえ、その手際の良さには尊敬の感情があった。

10月4日

フェイク&トゥルー（後書き）

女の子が居なくて、特に面白みも華も無い錆びれた回。

10月4日      フリーマーケット

「まっとうなガクセイさんやってんだな」

今時の男は俺が自己紹介を軽くすると、そう一人で納得し始める。物珍しい目で俺を上から下までざっと眺めて頷く。確かにこんな所に制服来て迷い込むってのも珍しいかもしれないが、そこまで興味深いわけでもないだろう。吉野とかは制服のまま来ていてもおかしくなさそうな場所だ。

前に何かあつたのだろうか。俺は、この人と。

「デジカメ探してるんなら、最初のタトゥーした奴の店がいいと思うよ?」

「え、マジですか?」

「マジマジ。あいつは好きでやってるから。ここフリマだから型落ちが多いけど、高級品の名機しか並べてないから」

って事は、5万って本当にポツキリお買い得価格! だったという事が……どの道そこまで予算はないのだが。人は見かけにはよらないものだ。見た目の姿が、その人の中身と決まってるわけじゃない。という事なのだろうか。俺はそこまで人の見極めが上手いわけでもないらしい。今だって相手がどんな人間なのか分かっていないのだ。この男のフレンドリーさが素から出てるものなのか、化けの仮面を被っているのかさえも曖昧だ。恐らく、分かる人には分かるのだろう。

「ってかフリマなの?」

「一応ねえ……。客層がこんだから、スラムっぽいと思われるみたいだけど」

と言って、自分を含めた路地の人間達を指す。その人達も知り合  
いのようで、少しだけ今時の男に目配せやら、軽く手を上げるやら、  
小さなアピールをする。

「ま、最近は見たい目は普通でも怪しい奴多いから、だまされないよ  
うにしたほうがいいと思うよ」

そこまで男は言うと、俺に背を向けて路地の奥にチャラチャラと  
歩きはじめ。最後に「じゃ」という妙に親近臭い言葉と、バイビ  
ーとも言いそうな手草を見せて去っていった。

名前も聞けなかった。けど、どこか懐かしい感じがした。小学校  
以来の友達と出会った気分だった。でも、初対面のはずなのに何故  
そんな事を思うのだろうか。

帰路を歩きながら考えても、過去にあの男と出会ったという事実  
は思いだす事はできなかった。

? ? ? ? ? ? ? ?

「ふあああ……」

俺は帰宅し風呂に入り、夕食を済ました後の二時間。その後はと  
ある漫画をベットに寝転げながら読むことにそれなりの時間没頭し  
ていた。時計を見ると時刻は既に日付が変わった事を示しており、  
時間の流れというのは恐ろしいものだと思えて実感する。時間とい  
うのは気付いた時には思っていたのより数倍の時が流れている事も  
あれば、数分の一しか流れていた事もある。基本的に前者ならば  
時間を有意義に、後者ならばただらだと使ってる場合が多いだろう。  
そんな教訓を、過去に誰かに言われた。確かに言っている事は分  
かる、何となくなただけだが。でも、俺は真理までは読みとる事は出

来ていないだろう。理由として、今俺は前者と後者どちらに当てはまるかが分からないのだ。そんなのも判断できなくては、この教訓の意味が読み取れるわけがない。

「もうこんな時間か……」

今読んでいる『学園革命スクレボ』。名前からして推測はある程度出来るかもしれないが、よくある少年漫画という奴である。ただ漫画と言っても、既に連載終了している一昔前の古い漫画。何故俺の家にそんな物があるかという点、実の所よく分からない。いつぞや家を整理していた時に、数巻セットで発見したのだ。なんとなく、本当になんとなくなのだが、過去に誰かが持ちこんだ物な気がするのだ。身近にいる奴で一番確率が高そうなのは沙耶なのだが、生憎そんな珍しい事があつたら忘れないだろう。それこそ記憶を抜かれでもしなければ。

ストーリーはというと、どこにでもいそうな気弱な男子と、スパイ組織に所属する女の子がコンビを組み、学園の地下迷宮に眠る秘宝を求めて探検するというもの。そこには大小様々なトラップが仕掛けられており、二人はそれを協力しながら攻略してゆくという話。それには敵対する組織も係わっており、それとの銃あり近距離ありのバトルも魅力の一つだ。そして二人の関係も、徐々に進展してゆき……

と言つても、最終的にどうなるかは、俺はまだ知らない。でも、何故か俺は一度これを読んだか、もしくは誰かから話を聞いているような気がする。釣り針みたいなのうつつとうしい物、外れそうでも中々取れない蟠りが頭の中で引っかかっていた。

「ふああ……」

そんな事をふかふかのベットの上で考えている、しかも時間はも

う寝てもいいだろうと思われる所。となると、人の体は何を欲するかは明確だ。特に今日は何だかんやで色々であった日。HPはそれなりに減少している。

「く、くそお……」

必死に抵抗。ダメだ、睡魔に負けては……。こんなにも勝てなければ、先の強大な敵に勝てないぞ瑚太郎。俺はこれを超えなければ……。

ああ、でもだめだ……どンドン……目蓋……が……。

「……ガクッ」

と、抵抗空しく、気付いた時には完全に眠りについていた。

10月4日      フリーマーケット（後書き）

今回短いです。2000文字あるか無いか程の長さ。それと今回で10月4日は終わりです。

次からは他のキャラも動き出します、多分…。





顔を伏せて絶叫。我ながら中々の悲鳴だと思う。

まず思ったよりも乾いた音がする発砲音が一発分聞こえる。そして間入れず二発目の銃声。ああ、これは死んだな……そう思ったさ。でも、どこも痛くない。それか、死ぬって実は痛くないのか？ まあ体験したことはないわけだから、もしかしたら本当にそうなのかもしれない。

「……え？」

いや違った。それは、俺が撃たれてるんじゃないから。

俺の目の前に立っている男を見ると、胸には銃弾が二発突き抜けた跡。それこそ、風穴がぼっかりと空いていた。

「はい。これでジ・エンドね」

そして三発、四発、五発と、銃弾が再び発射された。気付いた時には既に、男は実体を失い、黒い粉のような粒子に拡散して消えていた。

「全く、何馬鹿やっているの？」

男を撃った張本人がいつのまにか姿を現していた。金髪の白いリボンの少女。完全無欠のスパイがそこにいた。愚痴を言いつつも、情けない事に尻餅ついてる俺に手をかざしてくる。何だかんだで心配だと思ってくれたのか。

「いやホント、マジで助か……ってえ？ 銃声！？」

何だ、また別の敵か？ でも彼女の銃口は俺のほうを向いたまま、少し焦げ臭い煙を漂わせている。いや、待てよ？ 俺のほうに銃口



背伸びして硬くなっている体をほぐす。夢では誰かから逃げるのに走り回ったり転んだりした気があるようなような。でも、結局は夢の話。現実の体には影響は及ぼさない。

「……え？」

体には及ぼさなくても、どうやら生活には大きく影響するようだ。

「ち、遅刻だあああああ!!!」

?十?十?十?十?

「うるせえ。静かにしやがれ」

腕を組んで椅子にふんぞり返っている吉野から、あいからわずの手痛いコメントを頂戴。いつもはここで切り返し、親しげな会話を二人で楽しむ所なのだが、今ばかりはご勘弁な状態だ。

慌てて制服に着替え、朝食も食べずに全力疾走。他人の家の庭を通り抜けながら、学校に行くまでの坂道までノンストップ。髪はぼさぼさ、体力メーターは八割方減少していた。

「ハア…ハア……」

運のいい事に、先生はまだ教室に来ていなかった。いつもならば一分と狂わず到着するのだが、何かあったのだろうか？ まあ、俺からすれば有難い限りなのだが。

「なあ、今日なんかあったのか？」

という事で、隣の吉野に質問してみる。

「……」

さっきのポーズに加え、目を閉じて頑なに黙っている。全く、素直じゃないな。

「なーよっしー。教えてくれよー」

ゆつさゆつさと、肩をゆすりながらもう一度質問。ガードは固いが、きつとこれも吉野なりのかまってほしいアピールなハズだ。朝の楽しいな会話を楽しみたいという。

「……転校生だ」

「え？」

「転校生だって言った。それと、二度とその呼び名を使うな。トルネード・ザ・タイフーンを喰らわずぞ」

「成程」

だそうです。それはまあ、先生が遅れるのも納得である。それと、それだと竜巻台風とかいう、意味の分からない言葉になるぞ。

「でもよ、俺、ソイツ昨日で会っちゃってるんだよなー」

このタイミングで転校生と言えば、昨日の騒がしいアイツしかない。えーと確か、名前は……鳳ちはやだったか。

……ただ、本人から聞いたわけではなく、沙耶の口から出た名前なのだが。まあ嫌われてるし。

「それがどうした？」

「何て言うかさ。そうだな、中インパクトのある奴だったよ」

落ちてきたり、転がったり、大脱走したり、さくらんぼだったり。

「下らねえ……」

吉野は群れない狼だ。こういう事にはあまり関心がないのだろう。でも、回りはちゃんと把握している。それも、今日に限った事ではない。いつもそうだ。回りに群れなくとも、周りは見ている。吉野とはそういう奴だ。

「はいみなさーん。席についてくださーい。始めますよー」

散々焦らして、ついに登場する担任。いつもどろりに振舞ってはいるが、それも先生なりの演出なのか。クラスの雰囲気はまだ見ぬ転校生のせいで浮足立っていた。

「それではここで、転校生を紹介しまーす。昨日一日期待させちゃいましたかー？ ではみんな、拍手で盛大にお迎え下さいね」

おおお…と教室だどよめく。感じ的には、コンサート前の雰囲気のようなものだ。

それに引かれてか、興味なさそうにしていた吉野も、この時ばかりは教室のドアに注目していた。

「じゃあ、転校生さん、どうぞー!!」

どよどよどよ、とさらに色めく教室内。みんなは胸の内にときめきとわくわくをたくさん秘めているのだろう。

そんな中静々入って来た転校生の鳳だが、あー顔知っているか新

鮮味が無いな……。ここに冷めた奴が一人……。いや、

「……………」

隣を見ると、机に突っ伏している奴一名。冷めてる組は二人目がいたようだ。

で、とうの転校生さんと言つと……

「……………」

表情こそ俺をピンポイントで睨んでおり、『げ』と今にも言いたそうだったが、特に声を出す事無く、教室の前、黒板の所にちよこんと立っていた。

数人はその視線の先が俺だという事に気づいているようで、『何で天王寺が？』という表情で俺の事を凝視していた。

「て、転校生の鳳ちはやです…よろしく…」

そしてこの、微妙にたどたどしい挨拶。なんか嫌悪感っぽいので、対応に困る。

俺と鳳の視線に気づいてない奴は、それを『緊張している』と解釈しているようで、『よろしくー！』とノリノリだ。

正直な所、鳳の容姿は一般的な評価からしてもかなりランクが高い。

で、それが俺を何か睨んでいる（熱い視線とも取れなくはない）のだ。正直、あまり良い状況とは言えなかった。

と言つても、こんなのはあくまで爆発的で、一時的なものだ。上手くあしらっておけば勝手に自然消滅するもの。来週にもなればきつと平和になるはず……

「じゃ、席は…とりあえず、次の席替えまでは定番の一番後ろかしら」

前言撤回。しばらくは、俺に平穏な学園生活は訪れないようだった。



10月5日

後ろの席に（後書き）

ちはや転校回：なのはいいですが、主にあるのは吉野の絡みぐら  
い。ここはあえて小鳥抜きで書いてみたりしました。

最初の部分は何か、思い付きです。  
そろそろ他のヒロインも登場出来るはず。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1901v/>

---

Rewrite †song†

2011年10月26日02時10分発行